テクノファNEWS 第107号
2013年12月10日 発行

テクノファNEWS

Technology Transfer

ニュース・ダイジェスト

◆◆ ISO14001：環境マネジメントシステム2015年版のタイムライン変更

ISO14001の改訂を担当するISO技術委員会TC207は、規格発行に関して新しいタイムラインを採択し、2015年１月の予定を2015年６月に延期した。主な理由は、委員会原案（CD1：2013年３月回付）に対して、各国委員会から形式や内容（新しい構成、新しい要求事項）について、多数のコメントが寄せられ分科委員会SC1での作業に時間が掛かったためである。

新しいタイムラインは、以下のとおりである。

・ 2013年11月：CD２回付
・ 2014年3月 - ５月：CD２コメントの検討及び国際規格案（DIS）への移行
・ 2014年9月 - 11月：DIS投票
・ 2015年3月 - ４月：最終国際規格案（FDIS）投票
・ 2015年6月：国際規格（IS）発行

2015年版に従った認証についての手順はまだ提案されていないが、既に２年間の移行期間について議論がされている。委員会では、組織が2014年５月発行予定のDISの新要求事項を考慮に入れる必要があることについて合意している。

http://jsanews.info/?p=1924

◆◆ FSSC22000（食品安全認証基準）：新バージョン2013年10月31日から適用

食品安全認証財団（FSSC）は、2013年10月31日から適用の認証基準フレームの第３版を発表した。修正は、特定の規制要求事項及びインプットのマネジメントに関わるところについてである。

第３版に関する（2004年に発行したFSSC22000に対する変更を含む）変更点は次のようなものである。

1．組織は、成分や原材料の仕様が適用される規制要求事項（例えば禁止物質の検査）を考慮していることを確実にする。
2．組織は、製品の健康安全を確認する重要なインプットが正しく分析されていることを確実にする。
3．撤退／リコールのような出来事が、製品の適合性に影響する傾向がある場合には、認証保持者は認証機関に3営業日以内に通知しなければならない。
4．モニタリング監査は、すべての要求事項が維持されていることを少なくとも毎年検証（サンプリングは可能）しなければならない。

第３版によるロゴの変更はないが、認証書は変更される。新しい第3版はすべての新しい認証取得者に

【ニュース】ニュース・ダイジェスト、テクノファ最新ニュース ･･･ 1～3
【講　演】「リスクマネジメントとしてのメンタルヘルスケア」
臨床心理士、キャリアコンサルタント　井本惠章 氏 ･･･ 4～7
【寄　稿】OHSAS18001がISO規格になる　(株)テクノファ 会長　平林良人･･ 8

適用されるが、既に認証を取得している組織は2013年10月31日から2014年５月31日までに切り替えなければならない。モニタリング監査のための新しい要求事項は、すでに2013年１月30日から適用されていることに注意が必要である。

2013年９月FSSCは動物飼料を含むようにFSSC22000の適用を拡大することを発表したが、この拡大は、PAS222（動物飼料の製造における前提条件プログラム）に基づくものとなる。

http://jsanews.info/?p=1914

◆◆ 情報セキュリティマネジメントシステム規格ISO/IEC27001の改訂

附属書SLに基づいた情報セキュリティマネジメントシステム規格ISO/IEC27001の改訂版が10月発行された。サイバー攻撃の数が増え、巧妙化している現在において、企業がその情報資産を保護する上でISO/IEC27001を実行することは不可欠である。実際に、イギリスが今年初めに実施した調査によると、イギリスの企業に影響を及ぼす情報セキュリティ侵害の数は増加し続けている。脅威にさらされているのは大企業だけではない。イギリスのビジネス、イノベーション&技能省に代わってPWCが行った調査では、昨年セキュリティ侵害を小企業の87%が報告したという。以前は大企業にだけ見られたインシデントレベルを小企業が経験していることが浮き彫りになった。そのうえ、報告書は新しい科学技術の利用の増加により、ソーシャル・ネットワーキング・サイト、スマートフォンおよびタブレットに関連したセキュリティ及びデータの侵害をますます多くの組織が被ることになろうことを示唆した。

改訂版（ISO/IEC27001:2013）は個人情報の盗用、モバイル機器に関連したリスク及び他のインターネット上の脆弱性の特定を確実にするために付属書Aのセキュリティ管理を大幅に改善した。

http://www.iso.org/iso/home/news_index/news_archive/news.htm?refid=Ref1783

◆◆ 国際標準化機構（ISO）教育機関のマネジメントシステムに関する新しいプロジェクトコミッティーを創設

ISOは、教育機関のマネジメントシステムに焦点を当てた新しいプロジェクトコミッティー（PC）の創設を承認した。このPC288（教育機関のマネジメントシステム－要求事項及び使用の手引）の幹事国は、韓国技術標準院（KATS）が担当する。米国規格協会（ANSI）は、このPCに対応する米国技術諮問グループ（TAG）の運営又は活動に参加する組織を求めている。

http://jsanews.info/?p=2004

【特別コースのご紹介】

「テクノファ年次フォーラム」開催日の午前中に東京・大阪同時開催!!
年次フォーラムの事前知識としても、ぜひご参加ください。

■次期ISO9001/14001に必要となる組織の対応Ⅱ
～マネジメントシステム規格の今後と、マニュアル対応実務のステップ～【SQ43】
2015年予定のISO9001/14001規格改正に向けてどのように規格が変わるのか、すべてのＭＳＳ（マネジメントシステム規格）に適用される附属書Ｓしとは何なのか、実務を進めるステップを短時間でお伝えします。組織の方だけではなく審査員・コンサルタントの方にも必見のセミナーです。
日　程：12月20日（金）10:00～12:00東京・大阪開催
受講料：テクノファ会員：7,020円、一般7,800円　※税込価格

【新規コースのご紹介】

■次期ISO14001に必要となる組織の対応 ～ISO14001規格の最新情報と対応～【SE38】
最新の規格案をベースとした改正の背景・経緯・最新状況、改正のポイント、要求事項の考え方と必要となる組織の対応について解説します。講師には、吉田敬史氏をお招きし国際会議での議論に加わっている日本代表エキスパートだからこそ語れる、規格改正の意図をお伝えいたします。
日　程：2月10日(月)川崎、2月12日(水) 大阪
費　用：テクノファ会員：8,550円　一般：9,500円　※税込価格

■EMS活性化コース　～省エネルギーを革新するエクセルギーの現場活用法～[eラーニング]【SE41】
効率90%のはずが実は38%！　エネルギーロスを正しく把握し、ISO14001のEMSに組み入れる方法を、eラーニング(ビデオ動画)で学んでいただくものです。

第１講は、無料でご覧いただけます。　4,000円　※税込価格（1か月間有効）　※テクノファ会員も同額です

テクノファ最新ニュース

創立20周年記念年次フォーラム開催について

当社では今年度創立20周年を迎えるにあたり、日頃ご愛顧いただいております皆様に感謝の意味を込めまして12月20日（金）大田区産業プラザにおいてテクノファ年次フォーラムを開催いたします。今回は初の試みとして関西方面の方にもLIVE配信の会場を用意しました。CIVI新大阪研修センター

20周年記念として、今回のテーマは「各分野ISO/マネジメントシステムにおける附属書SL導入による影響」各分野のISOマネジメントシステムの規格開発に直接携わっている方々が一堂に会した基調講演とパネルディスカッション。ご来場の皆様からの質疑応答を含め、ホットな情報を共有するまたとない機会となりました。

講演内容

■ 基調講演１　「共通テキスト（附属書SL）の最新動向」　13:10～13:50（40分）

奥野 麻衣子 氏

ISO/TC207/SC1 日本代表委員・TMB/TAG JTCG対応TC207/SC1代表委員

■ 基調講演２　「次期ISO9001の最新動向」　13:50～14:30（40分）

中條 武志 氏

ISO/TC176（品質マネジメント及び品質保証）国内審議委員会委員長

■パネルディスカッション　14:50～17:00（130分）

●テーマ：『各分野ISO/MSSにおける附属書SL導入による影響』

＜パネラー＞

奥野麻衣子 氏　ISO/TC207/SC1 日本代表委員・TMB/TAG JTCG対応TC207/SC1代表委員

中條　武志 氏　ISO/TC176（品質マネジメント及び品質保証）国内審議委員会委員長

野口　和彦 氏　ISO31000（リスクマネジメント関連規格）日本代表委員

吉田　敬史 氏　ISO/TC207/SC1日本代表委員・国内委員会委員長

高取　敏夫 氏　ISO/IEC JTC1/SC27 国内委員

＜コーディネーター＞

平林　良人　弊社会長、元ISO9001日本代表エキスパート、現国内ISO9001対応WGメンバー、PC283（労働安全マネジメントシステム）国際エキスパート

詳しくは、こちら ⇒ http://www.technofer.co.jp/convini/forum2013.html

リスクマネジメントとしてのメンタルヘルスケア

～臨床心理士が伝えたい、組織が生き残るためのメンタルケア～

臨床心理士・キャリアコンサルタント　井本　惠章 氏

本稿は本年６月大阪で開催されたテクノファ・フォーラム大阪から井本惠章氏の講演を紹介します。

皆さんこんにちは。

リスクマネジメントは各方面でシステム的な研究がされていますが、産業界で組織がいかに開発されるのか長年考え感じてきたことを紹介させていただきます。結論からいいますと「組織の中で働いている人がどれほど機能しているかに尽きる。」ということです。そうした視点から一緒に考えていきたいと思います。

- **人間は何のためにきているのか？**
  物理化学（生物学）的意味・人文科学的意味
- **人間は社会に起源を持つ**
  人間は人間社会において人間となり得る
- **人間は衝動を持つ**
  衝動は人間の精神活動・行動の根幹

■人間が生きる意味と衝動

人間は何のために生きているのか。物理学的（生物学的）には子孫を残して朽ちていくことですが、人文科学的（心理学的）な意味でいうと人間は感情や心の動きを持っている存在であり、これは厄介ですが私たちの貴重な本質でもあります。

私達は社会に起源を持っています。人の間の人として、社会において人間となり得る特質を持っています。人の間にいなかった人間の例ですが、狼に育てられたアマルとカマルという野生児は、宣教師の献身的な愛情を持ってしても人間らしい感情・行動が育つことはなく人間社会への復帰は叶いませんでした。

人間として各年齢レベルの経験を経ないと発達が困難、という発達論がありますが、それが上手くできないのが発達障害です。遺伝子的、生物学的な意味もありますが、発達障害でも、様々な教育訓練により社会で活躍する可能性があります。

人間の精神活動、考える・遊ぶ・喧嘩するなど

- **イドの衝動**
  - 自己実現の衝動
  - 他人よりの承認や愛を求める衝動
  - 自己の存在の意味を探求する衝動

の行動の根幹には「衝動」があります。

私達は「自我」を持っています。臨床心理学での精神分析では「自我」は3層に分かれていますが、境界ははっきりしていません。

母の胎内では羊水が外界で、宇宙全体が自分のものです。生まれた瞬間から、自分と外界との関係が始まります。外界は天敵で思い通りになりません。困ったり悩んだりする状況は、自分の思い通りにならないことに対して嫌だなと感じることだと言えます。

しかし、それでは社会で生きていけないため、「超自我」が「自我」の周りに形成されます。これは躾、道徳など外界と上手く関係していくためのルールのようなものとして私たちに植え付けられています。

「自我」の下に「イド」（衝動）がありますが、これはエネルギーです。胎内にいた時のように世界は自分中心という衝動だけでは生きていけません。「自我」が「イド」と「超自我」の間にあって「イド」の衝動・エネルギーをコントロールします。「超自我」が薄いと、「イド」の衝動・自分勝手をコントロールせずに済みます。

好き勝手な発言、わがままなどは「超自我」が薄く、「自我」が「イド」のエネルギーを表出し易い状態です。逆に「超自我」が厚いと、大人しい・四角四面などと表されます。このあたりが適切に機能していることが大事です。

「意識の3層」では、外界に対して気が付いている「意識」、少し考えて思い出したりする「前意識」、気が付いていない部分「無意識」があります。

「自我」と「意識」の層はよく似ていて、それぞれの境界ははっきりせずに発達、成長していきます。

■自己実現の衝動と防衛機能

「イド」は自己実現の衝動、他人からの承認や愛を求める衝動、自己の存在の意味を探求する衝動、そういうエネルギーを持っています。こうした「衝動」を具現化しようとするエネルギーが基本的に私たちを動かしています。そこが動物との決定的な違いです。

「イド」の「衝動」を充足させ、エネルギーを充電していくことが適切に行なわれるならば、人間は豊かに成長します。適切に充足されない場合は外界に対して不適応を来たします。

・自我の防衛機制

・受け入れがたい現実への心理的機能

・無意識に発動するので意識できない

例えば、遅刻して「寝坊しました。」と言い訳します。何故言い訳しなければいけないか。「超自我」では遅刻はいけません。「イド」の「衝動」、他人から認められたいエネルギー、この深い部分を責められると大変です。「自我」が攻撃を防衛せざるを得ません。受け入れ難い現実が自分に起こった時に、心が防衛しようと無意識に反応が起きます。意識して言い訳ができればまだよいのですが、こうした心理機能は無意識に働きます。

意識すると大変な辛いことや嫌なことは感じないように防衛が働き、無意識の中にたくさん押し込まれます。この一つ一つをコンプレックスといいます。そうした防衛が働くと柔軟に活動することができなくなります。

「衝動」により、自分はあくまでも自分でありたい、子どもが階段から何度も飛び降りて一段二段と高くなる、失敗しても繰り返し成功につなげていこうとする一見無意味な行動、それは自己実現しているわけです。

そうした自己実現の衝動、存在を認められたい衝動は、何としても充足しようとする強烈なエネルギーです。それを男子は強く、女子はつつましく、勉強を頑張り一流大学から一流企業に入らなければいけないなど、ねばならないという「超自我」によって「イド」の衝動が充足されないと、防衛が働いて無意識の中に苦しさが押し込められます。

調子のよいときは身体が上手く動くけれど、落ち込んでいるときは上手く動きません。精神も肉体も動かなくなり、うつ病になるのです。うつ病には生物学的なものもあります。

■日本における社会構造

・日本における社会の構造

個の明瞭さ、個の不明瞭さ

・父性原理と母性原理

自然の克服、自然との融合

ここで、日本における社会の構造を考えてみましょう。

西洋では自己主張し、個が明瞭に表されないと尊ばれません。私たちは個が不明瞭で皆と一緒、自己主張は得意ではありません。不明瞭が悪いということではなく、そういう社会構造になっているのです。

西洋は狩猟を主とした自然を克服しようという父性原理で歴史を積み重ねてきました。ところが日本は母性原理、四季・自然の恵みや作物などに

包まれて、自然と融合した文化や歴史を築いてきたのです。こうした決定的な違いがあります。

日本では昔、集落を築いて定住する時に祠や社を建て守り神のようなシンボルを造り、皆で集まって決め事をするのが集団の基本的な形でした。社を建てて集まることから社会と言う訳で、西洋の社会の概念とは構造が根本的に違います。

もうひとつ、精神分析の考え方で「アモルファス人格構造」という自我構造が私たちの特徴として考えられました。父性原理は個・人格がソリッド、堅くしっかり明瞭になるのに対し、アモルファスは不明瞭で、スライムのようにどろどろと可変ですが一つになっています。こうした社会で暮らしていると、集落の子どもであればよその子という感覚がない、このような日本での人間関係の特徴は、西洋とは全く違う次元です。しかし、自我の構造と意識の構造の機能自体は変わりません。

■人を理解するということ・本音と建前

西洋では自分と他人の違いが明瞭なので他人を理解しようとする討論の文化が基本的にありますが、私達は皆一緒ですから討論する必要性がそれ程ありません。西洋の文化が入る中で、討論の習慣の少ない日本では他人を理解することが非常に難しくなってきました。

・人を理解するということ

行動の理解と内的力動の理解、自己への気づき

・本音と建前

本音と建前の一致・不一致、本音と建前を理解することの難しさ

「行動の理解と内的力動の理解、自己への気づき」と書きましたが、「イド」の衝動が人間の精神的エネルギー、行動や考え方の根幹にあり、そこが充足されないと不適応が起こります。それが解かれば何とか進むことができますし、解かる努力は必要です。しかし無意識なので本人も気付いておらず、私たちも推測はできますが真実かどうか判断できない、そういう難しさがあります。

価値観や良し悪しは別にして、何故その人はそう考えるのかを理解するのは大事なことです。その人の考え方（内的力動）が解かると、こういうところが良くない、或いは良いと気付き、同時にそういう事が繰り返されるとお互いにとってプラスの状況ですから、それを吸収しあう事が繰り返されていく、意思決定のプロセスがそうなのです。

組織の現状として、何も意思決定ができずに結局トップが決定し失敗したら責任をとる、これでは何も残りません。

皆で意見を出し合い、それぞれの意味や価値を良く吟味した上で方向性を出すと、失敗しても皆の持っている価値観は良く把握できているのでそこから次の意思決定が可能になってきます。ここが一番大事です。

人を理解する上で難しいところ、矛盾や不条理を感じるところは、本音と建前があることです。

例えば残業を命じられ、約束があるので断りたいが上司は認めないだろうなどと思い断れない、ここに本音と建前の不一致があります。この不一致の部分が問題です。「今日は約束があるので残業できないけれど明日はやります。」と言いたいけれど言えない。本音はこうだが、建前はこうなるというところが明らかになることが、人を理解することに通じてきます。

本音と建前を出し合ったところに意思決定が可能になってきますが「イド」の衝動から発している個の本音が、完全主義（～ねばならない）という考え方に立脚した超自我によって阻まれてしまい、「型」にはまったことしかできなくなります。

・自我の防衛機制

人間の精神活動に必要であるが、厄介なもの

・心の安全を保障すること

個々の内面の問題はどうなっているか、「いいよ」と受け止められるか

自我の防衛規制が精神活動に必要であるが厄介なもの、とありますが無意識に防衛が起こるから厄介なのです。受け入れがたい現実を受け入れなくてはならないのは大変なことです。

意識のレベルに残ると大変だから自動的に防衛が働く、それほどに厄介であり必要でもあるのです。これは何を守っているかというと「イド」の衝動、自己実現の衝動です。

心の安全を保証することは、その人の意見や価値観を否定せずに、自分らしさを出してよいのだ、という気持ちで受け止めることです。何でもいいということではなく、あなたの意見はそのまま聴きますよと思えることです。

■柔軟に機能する有機体

カール　ロジャーズという世界的な教育学者であり心理学者が使っている言葉です。

Fully-functioning Organization
（柔軟に機能する有機体）
（Carl R. Rogers）

人間として、人間の集合体として
（家庭・学校・会社・社会・・・・）
何処までも成長していく有機体

fully-functioning Organization（柔軟に機能する有機体）有機体という言葉を使っています。これほど科学が発達した現在でも蟻一匹作れません。ましてや複雑な機能を持った人間となるとどうでしょうか。精神活動や生物学的な機能を持った存在。血、骨ありとあらゆるものが機能しているという意味です。辛いものは辛い、嫌なものは嫌と感じられ、どうしたらより人間社会に対応していけるのか柔軟に対処できる有機体です。

人間として人間の集合体、家庭・学校・会社など社会全体に対して、我々は死ぬまでイドの衝動がある限り、より自分らしく人間らしく生きていく力を持ち、あくまでも成長していこうとする有機体なのです。またそういう一人ひとりが集まった大きな組織、会社もある意味有機体なのです。組織は英語でOrganizationです。各人ごとに機能を発揮するならば組織全体では最高の機能を発揮するという事です。

こういう基本的な認識を我々が共有することができればどんな状況にも耐え得るというのが極論です。

阪神淡路大震災の翌日に私は神戸に入り、阪神高速が倒れているところを歩いていると、丁度夕方、家の前で拾った瓦礫で鍋を炊い支度していました。それを見た時大丈夫だと思いました。なぜかというと人間として柔軟に機能し、そうした状況下でも生きていこうとする力がある。東日本大震災の時も大変な最中、ランプの明かりの中に子どもが微笑んでいる写真を見ました。醤油屋さんが麹を取って東京で培養して操業を続けようとしていること、ある会社の社長が4月に新規採用をして雇用を守る姿など、基本的に我々には日本人としての歴史を通して独特な考え方を培ってきた資源があるわけです。他にも、大きな祭りでは地域の若者が長老の指示に従っていますし、恩師に挨拶する光景などが生きていて、まだ捨てたものではない特質を持っているのです。

そういう機能を復活しようと土壌を耕す人が、一人でもいれば、回復する可能性があります。

カール　ロジャーズは組織での一番悪い形を次のように述べています。「隅に引っ込んでじっとしているのが一番安全だが、一番機能していない状態である。」と。皆で参加して皆で決めようというのが民主主義だといいますが、戦後の民主主義は個の確立の上に立った民主主義にいろいろな考え方が混入し、古き良き物を失っています。

石田梅岩の経営学が見直されています。少なくとも私が知っている戦後60年間、アメリカのものを輸入して政治・経済・教育、結果は出ているのでしょうか。1980年頃、成果主義が唱えられた当時、アメリカのセブンシスターズという７つの石油の大企業がありますが、経営に対して何を勉強したかというと石田梅岩の哲学「終身雇用制」などを研究していました。良いか悪いか別で、石田哲学が日本を救うという事ではないけれど、「温故知新」といいましょうか、我々が持っている良いものをフルファンクションさせていくことも考えていく必要があると思います。

■心身症

コンプレックスが作られる状況、外界に適応していくのが非常に難しいときに、現実的にストレスが掛かります。ストレスには幾つか種類がありますが、一番厄介なのは精神的なストレス、心身症です。

・心身症

・日本心身医学会教育研修委員会　1991
身体疾患の中でその発症や経過に心理・社会的要因が密接に関与し、器質的ないし機能的障害が認められる病態。
（社会的要因とは、職場での種々のストレッサーと関連しているもの）

一般的に病気と思われているのはほとんどが心身症です。日本心身医学会で議論を重ねて「身体疾患の中でその発症や経過に心理・社会的要因が密接に関与し、器質的ないし機能的障害が認められる病態」と定義されました。社会的要因とは、職場での種々のストレッサーと関連がありますが、それらを回避しながら危機を乗り越えていく基本的な能力・資源・リソースが皆さん方の内にあるのです。組織の内に知恵・力・エネルギー全部あり、それが上手く発揮されるのが、フルファンクションであることをご理解いただき、人間関係・物の見方・考え方・意思決定などを少しでも変化させて豊かな生活環境・職場環境が展開されると良いと願いながらお話させていただきました。

ご清聴有難うございました。

OHSAS18001がISO規格になる

2013年11月
テクノファ　平林良人

組織における労働災害、特に死亡災害をゼロにしたいという理念は、世界中の労働者、経営者、行政が一貫して唱えてきた悲願である。朝元気に「いってきます」と言って出社した父親が、夕方には遺体になって帰ってくるという悲劇は、一家の柱を失うという経済的問題に加え、妻子に計り知れない精神的インパクトを与える。

OHSAS18001労働安全衛生マネジメントシステム規格は、1970年代に英国のローベンス卿が提唱した（ローベンス報告として有名）法的規制で労働環境をコントロールしようとしていた行政に組織の自主的取組を取り入れるという、当時としては画期的な発想にその原点をみることができる。

英国では18世紀にはじまった産業革命に端を発して、急激に近代産業が発展したがそれに伴い産業界における事故、災害の増大が大きな社会問題となっていった。当時は、この労働災害を減少させるには強制的に労働環境を規制することが最も効果的で、19世紀～20世紀前半には次から次へと新しい法律が作られた。しばらくはこの方法で災害を封じ込めたが、法律があまりに多くでき、行政も効果的に管理をすることができなくなり、20世紀に入ると上述したローベンス報告が提唱されるようになったのである。

ISOは英国BSI提案による労働安全衛生の国際規格を作ろうと、1997年ころから動き出したが、ILO(*注)の反対により10年以上その動きは封じ込められてきた。今回（2013年）OHSAS18001に代わる新しい労働安全衛生の国際規格が制定するための専門委員会ISO/PC283が設立された。これはILOが労働安全衛生の国際規格を制定するというISOを支持することになったことが大きい。ILOが賛成に回ったのは、OHSAS18001の認証数が世界で10万件にものぼり、世界の労働災害を減少させるにはこのISOの認証制度を活用することが有効であると考えたからである。

筆者は10月21日から1週間英国で開催されたISO/PC283労働安全マネジメントシステム規格の国際会議に参加してきた。そこで決まったタイムスケジュールによると2016年半ばには、新規格ISO45001が成立する予定である。

・2013年12月：WD１を回付
・2014年６月：CD投票開始（3カ月間）
・2015年６月：DIS投票回付（3カ月間）
・2016年９月：国際規格（ISO45001）発行

以上

（注）
国際労働機関（ＩＬＯ）は、次の憲章を掲げています。「いずれかの国が人道的な労働条件を採用しないことは、自国における労働条件の改善を希望する他の国の障害となる」（ＩＬＯ憲章）
ＩＬＯは「世界の永続する平和は、社会正義を基礎としてのみ確立することができる」という憲章原則の上に打ち建てられています。また、１日８時間労働、母性保護、児童労働に関する法律、さらに職場の安全や平和な労使関係を推進する一連の政策といった産業社会の画期的な成果を生み出してきました。
ＩＬＯはこのような問題への取り組み、そして労働条件の世界的な向上をもたらす解決策の発見を可能にする国際的な制度的枠組みです。どのような国であろうと、産業であろうと、競争相手が同時に同じような行動を取らないかぎり、以上のような方策を導入する競争上の余裕はなかったと言われています。

テクノファＮＥＷＳ 第107号
企画・編集／株式会社テクノファ
2013年12月10日発行
〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町３－１ NOF川崎東口ビル
TEL:044-246-0910 FAX:044-221-1331
ホームページ⇒http://www.technofer.co.jp/